

# 文学通信 出版目録



- 全国の書店でご注文いただけます。お急ぎの場合はご連絡ください。
- 価格は税別です。
- 本の詳しい情報はwebサイトをご覧ください。

2024.10

〒113-0022 東京都文京区千駄木2-31-3, 1階101 文学通信

電話 03-5939-9027

FAX 03-5939-9094

メール info@bungaku-report.com

[bungaku-report.com](http://bungaku-report.com)

今まで刊行した  
161冊の本を  
紹介します



# 戦乱で躍動する日本中世の古典学

前田雅之

ISBN978-4-86766-047-8 C0095

A5判・上製・952頁

定価：本体12,500円（税別）

2024  
刊行

そもそも古典なるものの意識はどう生まれたのか。日々揺れ動きながら、過去・伝統を意識しつつ、伝統の枠組みの中で新たに古典学なり、和歌なりを生み出していくダイナミックな人々の行為を、政治変革や戦乱なかから描き出し、日本における古典知や、古典的素養のありかたを考える。古典と戦争はどのような関係にあるか。「文学」の重みを考え抜き、そのありかたを歴史的展開の中で叙述する。古典とは何か。国文学とは何か。根源から説き起こす。

【今後、古典が復興することはおそらくないだろうと思われるが、世界情勢の変容に伴う、新たな国学、ナショナリズムの覚醒による全体主義的な復興ではなく、自己のアイデンティティとは何かという真摯な疑問によって、加えて、現在を相対化するためのツールとして、古典が復興することを今は祈りたい。古典をもつ国・共同体に生まれた人間としては、古典から逃れることなどできないのである。ならば、堂々と古典の中に飛び込もうではないか。それが根無し草にならない唯一の方法であるからである。】……「エピローグ」より

## 【目次】

### プロローグ 古典と戦乱・抗争をめぐる序章

はじめに—文学と戦争の親和性—

一、前近代文明圏の古典と日本の古典・和歌

二、日本古典における「文学」の重み

## 第一部 和歌の世界

### 第一章（総論1）勅撰集の展開と和歌

序論 戦乱・政治変革と古典・和歌の相互補完的循環構造

一節 『古今集』・三代集

二節 『後拾遺集』～『千載集』—勅撰集という〈伝統〉の形成—

三節 『新古今集』～『新統古今集』—『新古今集』以降の勅撰集の撰集—内乱・抗争・正統性—

各論1 戦乱と撰集—両者の相補的關係をめぐる—

四節 応仁の乱前後における和歌の隆盛

各論2 実朝の題詠歌—結題（＝四字題）歌を中心に—

各論3 足利將軍家における政事と文事—武家執奏・和歌・打聞—

各論4 古典和歌の世界と《十二か月風詠》

各論5 僧侶の恋歌—野僧と頭密僧をめぐる—

## 第二部 古典学の世界

第二章（総論2）顕と密—注釈における前提的思考をめぐる—

第三章（総論3）古典的公共圏の成立—本文・注釈・古典の成立—

第四章（総論4）古典学の展開1 鎌倉期～南北朝期

各論6 放り出された「古事」—『古事談』と古典的公共圏—

各論7 中世人は「橋姫」をどのように読んだのか

各論8 古典的公共圏の〈春〉—西円の源氏注釈をめぐる—

各論9 『弘安源氏論義』をめぐる史実と物語

各論10 『弘安源氏論義』をめぐる史料と説話

### 第五章（総論5）古典学の展開2 室町期 応仁の乱前後の展開

一節 応仁の乱以前の古典学

二節 応仁の乱時および乱以後の古典学

各論11 和漢から漢和へ—対中国観の変容から—

各論12 「鬼神」と「心正直」—中世太子伝の蝦夷形象をめぐる—

各論13 和語を和語で解釈すること—一条兼良における注釈の革新と古典的公共圏—

各論14 『源氏物語』はどのように注釈されたか—『花鳥余情』の力学—

各論15 『花鳥余情』—兼良の源氏学—リアリティーを担保する可視的存在—

各論16 文芸知のもつ力—知と財が融合する時—

各論17 パラダイムとしての仏教—『源氏物語』と天台教学—

各論18 藤壺密通事件をめぐる言説と注釈—それははたしてタブーだったのか—

### 第六章（総論6）古典学の展開3 近世へ

一節 天下統一～近世濫觴期の古典学

一、九条種通

二、細川幽斎

三、中院通勝

四、紹巴

おわりに

二節 近世古典学の始まり—季吟と契沖—

はじめに

一、季吟

二、契沖

おわりに

各論19 宗祇から契沖へ

はじめに

一、『百人一首』注釈における中世と近世—宗祇と契沖—

おわりに

各論20 ゴシップの公共圏

はじめに—「おぼえ」・「聞こえ」・「人間き」—

一、『切臨抄』の「口伝」—浄化回路（1）—

二、孝謙・道鏡と玄奘—浄化回路（2）—

おわりに

各論21 大名文庫形成試論—大名はなぜ古典籍を集めたのか—

一、武家と古典

二、『大綱抄』から

おわりに

### エピローグ 近代・古典・戦争

初出一覧

あとがき

索引



# 五山文学探究

資料と論考

堀川貴司

ISBN978-4-86766-053-9 C0095  
A5判・上製・392頁  
定価：本体10,000円（税別）

2024  
刊行

その歴史と広がり、表現はどのようなものだったのか。五山文学を探究し続ける論考、全20章。

第一部「総論 五山文学の歴史と広がり」では、中国詩総集および五山詩総集、五山文学別集それぞれについて編成の特徴についての論考や、五山の文学や学問が、公家社会と交流していく様子を時代を追って通覧できるようにしたもののほか、生きた唐物である来日僧の語録や墨蹟を取り上げて、五山あるいは広く日本社会における意義を考えた論考、五山における出版活動についての論考、同時代の他ジャンル、あるいは文化全体との関わりでは重要性を増してくる、この時期の五山文学を概観したものなどの論考を収録。第二部「各論 五山文学の表現」では、作品の生成の場や資料、作品そのものの読解と位置づけなどを論じる。第三部「資料紹介・書評」では、一休の言説がその門弟らによって変形流布し、近世の一休像とつながっていくことを『自戒集』関連資料によって推測した「一休関係資料紹介—『自戒集』関連資料と『一休老和尚不審物』—」ほか、重要資料の解題・翻刻を収めた。全体像を見渡し、細部にも注目する、五山文学研究の最前線。

## 【目次】

はじめに

### 第一部 総論 五山文学の歴史と広がり

- 第一章 五山文学における総集と別集—編成を中心に—
- 第二章 公家の学問と五山
- 第三章 壬生雅久の文事—「公家の学問と五山」補遺—
- 第四章 唐物としての書と書物—無学祖元を例に—
- 第五章 五山版をどう考えるか
- 第六章 室町後期の五山文学

### 第二部 各論 五山文学の表現

- 第七章 富士山像の変遷
- 第八章 故事の利用—邵康節を例に—
- 第九章 人物の受容—謝靈運を例に—
- 第一〇章 画賛の表現—能楽に関わって—
- 第一一章 「観世小次郎画像（賛）」再考
- 第一二章 五山僧侶の教養—古潤慈稽を例に—
- 第一三章 後陽成天皇時代の漢詩文—英甫永雄を例に—
- 第一四章 『江湖風月集』注釈の展開—中世から近世へ—

### 第三部 資料紹介・書評

- 第一五章 一休関係資料紹介—『自戒集』関連資料と『一休老和尚不審物』—
- 第一六章 『叔悦禅懺詩卷』解題と翻刻
- 第一七章 『文選聞書』解題と翻刻
- 第一八章 上村観光来簡集『交遊帖』解題と翻刻
- 第一九章 森大狂来簡集『列岳名匠尺牘』解題と翻刻
- 第二〇章 書評 川本慎自著『中世禅宗の儒学学習と科学知識』



# 源氏物語の戦略

引用と反復

高橋早苗

ISBN978-4-86766-046-1 C0095  
A5判・上製・328頁  
定価：本体5,500円（税別）

2024  
刊行

『源氏物語』の〈戦略〉、それは読者を惹きつけ楽しませるためのものである——。その〈戦略〉の実態を多数の例をもとに論証していく書。

先行作品をいかに取り込むか。〈反復〉という文学的技法で何を効果的に伝えようとしたのか。そしてそれに読者は気づくだろうか。多岐にわたる試みを丁寧に解き明かす。

「同時代の様々な読者層を幾重にも惹きつけ、楽しませるものとしてあった文学的〈戦略〉は、その後、時を経てなお、多くの読者に響き続ける。

【〈引用〉と〈反復〉という『源氏物語』に仕掛けられた文学的技法は、多様な読者の知識・素養のレベルに応じて作用する場合と、レベルに関わらない場合とを合わせもつ、極めて戦略的なものであった。気づかなくとも十分楽しめるが、気づけばもっと面白い。このようにして同時代の様々な読者層を幾重にも惹きつけ、楽しませるものとしてあった文学的〈戦略〉は、その後、時を経てなお、多くの読者に響き続ける。本書は、そうした『源氏物語』の〈戦略〉の実態を多数の例をもとに論証するものである。】……「序章 『源氏物語』の戦略と読者」より

## 【目次】

序章 『源氏物語』の戦略と読者

### 第一部 〈引用〉という戦略—隠されたメッセージ

- 第一章 紅の衣装と涙の和歌—末摘花の姫君の失敗《付・「紅の涙」の用例—勅撰集と私家集における—》
- 第二章 「梅」を「かざし」た和歌—御仏名の系譜と光源氏の〈老い〉
- 第三章 藤壺とかぐや姫—『竹取物語』と朝顔巻の出現の意義
- 第四章 「枯れゆく」宇治の大君—『白氏文集』「婦人苦」と最期の問いかけ
- 第五章 「日」と「露」の情景—『観普賢経』と紫の上の死の形容・光源氏の生

### 第二部 〈引用〉という戦略—物語のその後

- 第一章 琴を奏でる男、賞賛する女—司馬相如伝と若紫巻での出会い
- 第二章 「家鳩」のいる邸—『法華経』「譬喩品」と夕顔巻の光源氏
- 第三章 継母との養親子関係—『史記』「呂不韋列伝」と明石の姫君の立后

### 第三部 〈反復〉という戦略—浮かび上がる差異

- 第一章 若紫巻の嵐の夜の「うたて」—「教へ」いそぐ光源氏
- 第二章 『源氏物語』の「たぐひなし」—紫のゆかりの女君たち
- 第三章 繰り返される二人妻説話—若菜上・下巻における紫の上の苦しみ
- 終章 『白露』の試みと読者—昔の物語に怯える男君と女君
- 附 誰の「あはれ」か—『白露』「思ひ知れ」歌の解釈をめぐる

初出一覧 あとがき 索引（人名・書名）



# 役者絵の図像学

錦絵八犬伝を読む

岩田秀行・小池章太郎

ISBN978-4-86766-050-8 C0074  
A5判・上製・304頁・フルカラー  
定価：本体 5,000円（税別）

2024  
刊行

誰を見ても同じ顔に見えるのはなぜだろう？  
役者絵を鑑賞・研究するための入門・基礎・実践！  
役者をどう見分ければいいのか。役者絵から何がわかるのか。役者絵という図像をトータルに理解できる書。

全体を三章に分けて構成。「I 対談」は役者絵入門編。たんなる説明ではなく、問題となる事柄を取り上げつつ理解が深まるよう試みた。「II 役者絵を読む」では、役者絵の基礎編として、似顔のもとつ価値と意義を考える。「III「八犬伝犬の草紙」を読む」では、実践編として、見立揃物「八犬伝犬の草紙」五十枚について、一枚一枚それぞれから何が読み取れるのか、解説を行う。最後に「役者絵この三十年」によって、文献を辿りつつ、この三十年の役者絵認識の変化を述べる。専門的に役者絵を学びたい人のための参考文献にもなっている。役者絵の世界に踏み込み、面白さを味わうために。フルカラー。

【まず、役者絵を見る場合にいちばん重要になってくるのが似顔という問題です。この似顔を認識するということが実に難しく、最初はみんな同じ顔に見えてしまうわけです。それはわたしなどが、例えばアイドルグループとかのメンバーの顔が見分けられないのと、まったく同じような状態だと思うんです。】……「I 対談」より

## 【目次】

I 【対談】役者絵を鑑賞・研究するための六つのポイント—本書を読む前に ①似顔を見分けよう 誰を見ても同じ顔に見えるのはなぜ？／江戸愛好家は逍遙以降も存在した／似顔が物語の発想や理解につながっている／役者中心で歴史を見る／役者の顔を認知するためには訓練あるのみ／「画師によって似顔絵の描き方が違う」問題 ②頭を見分けよう 役柄を鬘から見分ける／『戯場訓蒙図彙』の鬘の図の注意点／写実的な生え際と鬘の歴史／鬘の難しさの理由 ③衣裳を見分けよう 腰帯に注目する／附帳とは何か？ ④色と摺に注意 歌舞伎の色彩に関わる約束事／浮世絵の色彩／浮世絵の摺 ⑤画師と役者に代々あり 似顔絵のはじまり／画師の代数と役者の代数 ⑥絵の年代を調べよう 番付を利用して役者絵を考証する／上演以前に描かれた見立て役者絵／最後に「八犬伝犬の草紙」の特色と価値

## II 役者絵を読む

### 第一章 似顔という視点

1 似顔絵の効用／2 似顔絵と写真／3 似顔の表現とその解説／4 五代目松本幸四郎／5 五代目岩井半四郎／6 似顔研究の方向

### 第二章 似顔による考証例

1 似顔と考証／2 似顔と考証（その二）／3 役者群像について／4 役者群像について（その二）

### III 「八犬伝犬の草紙」を読む



# IIIF[トリプルアイエフ]で拓くデジタルアーカイブ

コンテンツの可能性を世界につなぐ

一般財団法人人文情報学研究所（監修）

大向一輝／永崎研宣／西岡千文／

橋本雄太／吉賀夏子（編）

ISBN978-4-86766-057-7 C0004  
B5判・並製・240頁  
定価：本体 3,000円（税別）

2024  
刊行

「デジタルアーカイブ」をより多くの人に使ってもらえる、よりよいものにしたい——

それを目指した世界中の人々が集まって創られ、広まってきている枠組み、IIIF（トリプルアイエフ：International Image Interoperability Framework）を紹介し、その概要、構築方法、活用例を紹介・解説する初の書。

第1部ではIIIFの概要の紹介、第2部ではIIIFに対応したデジタルアーカイブの構築手法、第3部では、具体的なIIIFの活用例を扱う。加えて、インタビューやいくつかのコラムも掲載。

コンテンツのよりよい在り方やさらなる利活用を考える方に。公共図書館、大学図書館、ほかデジタルアーカイブに関わる方必携の書。執筆は、大向一輝、永崎研宣、西岡千文、橋本雄太、吉賀夏子、本間淳、鈴木親彦、三原鉄也、高橋洋成。

【IIIFの素晴らしいことの一つは、「自分の（ここでは自組織という意味も含みます）デジタルアーカイブですべてを提供する」必

要がなく、むしろ「自分のコンテンツを用いてどこかの誰かがもっとよいサービスを提供することでコンテンツの価値を高めてくれる」仕組みが提供されたということです。これまでであれば、詳細な内容から便利な機能まで、すべてを自分のデジタルアーカイブで提供する必要があり、それ以上のものを提供することは、ほとんどできませんでした。どんなによいコンテンツを持っていても、それに合わせた高度なデジタルアーカイブ構築能力を持ち合わせていなければ宝の持ち腐れになってしまいかねなかった、つまり、自分のコンテンツの可能性がデジタルアーカイブ構築能力によって制約されてしまうという状況だったのです。しかし、IIIFが登場したことで、詳細なメタデータを付与できなくても、高度な技術を駆使できなくても、あるいは、高精度なテキストデータを提供できなくても、ただIIIFに準拠して公開すれば、同じコンテンツに関心を持っているどこかの誰かが独自に詳細なメタデータを付与したり、より高度なコンテンツとして統合・連携させたり、文字起こししたテキストデータとあわせて利便性の高いサイトを提供したりすることが容易に可能となりました。】はじめにより

## 【構成】

第1部 IIIFの概要

第2部 IIIFに準拠したデジタルアーカイブの構築方法

第3部 IIIFの活用事例



# 江戸の怪談

近世怪異文芸論考

近藤瑞木

ISBN978-4-86766-052-2 C0095

A5判・並製・464頁・

定価：本体2,800円（税別）

2024  
刊行

怪談は怪異への懐疑という逆境に耐え、鍛えられ、しぶとく生き続けた――。

最も怪談書の流行した18世紀。神秘への感受性はどのように醸成されていたのか。

江戸の怪談を新たに見出し、知られざるその世界を切り開く。

この時代のマイナーな怪談書類を作品論によって掘り起こし、再評価を試みる。またその中で、近世人の怪異観や近世怪談のこれまであまり論じられていない側面、例えば、儒家や神職の怪異観や、被害者意識の希薄な幽霊ばなし、浮世草子から草双紙へと引き継がれた怪談パロディの精神、宣伝素材としての怪談の機能などに光を当て、近世怪談についての理解を深めていく。

百物語や化物振舞のような怪談イベントを開催し、種々のネットワークを通じてハナシを共有する近世の共同的な怪談文化について明らかにもしていく。

「死」を免れぬ存在である以上、人間は本来超越的な存在を希求する。

いまだ超自然的発想が迷信として撲滅されることも、さまざまな信仰習俗の絶える気配もないのは、人の心がそのような領域を必要としていると見るべきであろう。

神秘への感受性を、宗教の影響は受けながらも、より自由で、豊かに表現できるのが、文学（すなわち近世怪談）の醍醐味ではないか――。最新の江戸怪談史がここに誕生！

## 【目次】

緒言 第一部 近世怪談考 一章 近世合理主義と怪談の流行

【一】近世怪談の特性／【二】合理主義的思潮―怪異否定論の普及／【三】怪異肯定派の世界観―澄澄と大伴恭安／【四】荻生徂徠の不可知論と上田秋成の怪談／おわりに―「工夫しての幽霊」 二章 儒者の妖怪退治 近世怪談と儒家思想 はじめに／【一】「妖は徳に勝たず」と儒者の妖怪退治譚／【二】「怪異」の制御 三章 往

生際の悪い死体 執着譚と蘇生譚の境界 はじめに／【一】実録的「蘇り譚」／【二】「是よみがへるにはあらざる事」／【三】臨終行儀書の姿勢／【四】蘇生者の殺害―『伽婢子』と『雪窓夜話』／【五】西鶴の「蘇れない」蘇生談 おわりに 四章 鷺水の時間意識 『御伽百物語』の「過去」と「現在」 はじめに／【一】名井の由緒異伝／【二】大蔵流宗家の神話／【三】両足院開祖秘話／【四】

京都の浮世草子 五章 「滑稽怪談」の潮流 草双紙に於ける浮世草子 『怪談御伽桜』の享受 はじめに―『怪談御伽桜』と江戸の草双紙／【一】『しやうのばけ』／【二】『模文画今怪談』／【三】『御存之化物』／【四】上方怪談の好笑性／【五】滑稽怪談の潮流 六章 鐘撞の娘轆轤首 近世的妖怪とその小説 はじめに／【一】鐘撞の巷説の背景／【二】カネの恨み／【三】戯作に見る鐘撞の巷説／【四】轆轤首詐欺譚の系譜／【五】前期読本『奇談玉婦伝』、『奇

伝新話』／おわりに―妖怪は人が作る 七章 茶碗児の化物 興福寺七不思議 はじめに／【一】東花坊のからかさ小僧／【二】大鳥居の朱盆／【三】水屋の小豆とき／【四】元興寺の鬼／【五】光林院の茶碗児

第二部 怪談仲間とハナシの共同体 一章 玉華子と静観房 怪談・談義本作者たちの交流 はじめに／【一】好阿江戸人説について／【二】玉華子と静話／【三】『花実御伽桜』と『諸州奇事談』一兄弟関係にある怪談書 二章 町奉行と講釈師 東随舎栗原幸十

郎の活動 はじめに／【一】東随舎と栗原幸十郎／【二】東随舎の事跡（1 講釈と相学／2 東随舎の交友と情報収集）／【三】東随舎の作品（1 中村瑤池堂／2 舌耕的題材／3 巷説から読本へ）／おわりに 三章 捏造される物語 噂ばなしと近世中期小説 はじめに／【一】見世物と捏造怪談／【二】怪談による広告／【三】自己宣伝怪談／おわりに 四章 化物振舞 松平南海侯の化物道楽 はじめに／【一】化物振舞説話の展開／【二】「幽霊」に故人を偲ぶ／【三】宗行と椿園／おわりに 五章 神職者たちの憑霊譚 『事

実証談』の世界 はじめに／【一】『事実証談』とその成立背景（1 書誌／2 著者・校正者と成立背景）／【二】神職者のネットワーク／【三】神霊譚と人霊譚（1 祟る神霊／2 祭祀を乞う死霊）／【四】神職、国学者の幽霊ばなし／おわりに 六章 「百物語」断章 【一】百座会／【二】『黒甜瑣語』の「百灯物語」／【三】月待・日待・庚申待の怪談会／【四】最終話の重要性／【五】理髪師と百物語／【六】細木香以と百物語／【七】彫師山本信司／【八】怪を語れば怪至る―百物語の現場性

第三部 妖怪絵本と黄表紙怪談集 一章 近世妖怪画の技法 「見えない世界」をいかに描くか はじめに／【一】おぼろに描く／【二】間接的に描く／【三】二次元を越える／【四】描かずに描く／おわりに 二章 黄表紙怪談集の諸相 『御伽百物語』、『怪談夜行』、『勇士怪談話』、『怪談奇発情』 はじめに／【一】『御伽百物語』と『諸国百物語』、『新説百物語』／【二】『怪談夜行』と『諸国百物語』、『怪談楸笈』、『怪談国土産』（1 『怪談夜行』の典拠と図案／2 禿帚子関与の読本怪談集『怪談国土産』、『天怪奇変』について）／【三】『勇士怪談話』と『伽婢子』／【四】『怪談奇発情』と『太平百物語』、『怪異前席夜話』／おわりに 三章 怪武家物の草双紙 『武家物奇談』を読む 【一】化物と武士／【二】『武家物奇談』／【三】化物本と絵手本 四章 石燕妖怪画の風趣 『今昔百鬼拾遺』私注 はじめに／【一】「ことば」の妖怪（1 泥田坊と古庫裏婆／2 蛇骨婆と白粉婆／3 機尋と蛇帯／4 鬼一口）／【二】石燕妖怪画の「雅」と「俗」（1 青行灯／2 あやかし／3 煙々羅／4 雨女／5 小袖の手）／おわりに 五章 石燕妖怪画私注 はじめに／【一】火前坊と百々目鬼／【二】毛羽毛現／【三】狂骨／【四】大禿と滝霊王／おわりに

第四部 読本怪談集の世界 一章 読本怪談集の展開 はじめに／【一】寛延以降、宝暦・明和期／【二】安永・天明期／【三】寛政以降／おわりに 二章 『老嫗茶話』の転変 写本から刊本へ はじめに／【一】『老嫗茶話』から『新編奇怪談』へ／【二】所収説話の対照／【三】『新編奇怪談』の編集処理／【四】堀主水の怪談と会津騒動／【五】『新編奇怪談』から『古今奇談紫双紙』へ／【六】『紫双紙』改題と再版の背景／おわりに 三章 『町聴私記』素材考 初期江戸読本史の一齣 はじめに／【一】先行研究と書誌について／【二】白話小説翻案系怪談としての『町聴私記』／【三】「侠夫奸智刑斃」と「智恵有殿」／【四】「斬二螻蛇一医レ酔レ截」と蛇食いの説話／【五】「撒二奇石一免二靈災一」と木内石亭／おわりに 四章 『警世通話』と明清小説―『娛目醒心編』、『姑妄聴之』、『獮園』 はじめに／【一】書誌と序文について／【二】「儒士の冥府を蔑如するを弁ずる話」と『娛目醒心編』／【三】「荻原左源次が妻妾骸をかへし話」と『姑妄聴之』／【四】「異仙来て井中に酒湧て酒匂の駅と云話」と『獮園』／【五】和製典拠に拠った三篇について／おわりに 五章 『(実説)妖怪新百話』の方法 「実話」化された読本

郎の活動 はじめに／【一】東随舎と栗原幸十郎／【二】東随舎の事跡（1 講釈と相学／2 東随舎の交友と情報収集）／【三】東随舎の作品（1 中村瑤池堂／2 舌耕的題材／3 巷説から読本へ）／おわりに 三章 捏造される物語 噂ばなしと近世中期小説 はじめに／【一】見世物と捏造怪談／【二】怪談による広告／【三】自己宣伝怪談／おわりに 四章 化物振舞 松平南海侯の化物道楽 はじめに／【一】化物振舞説話の展開／【二】「幽霊」に故人を偲ぶ／【三】宗行と椿園／おわりに 五章 神職者たちの憑霊譚 『事

実証談』の世界 はじめに／【一】『事実証談』とその成立背景（1 書誌／2 著者・校正者と成立背景）／【二】神職者のネットワーク／【三】神霊譚と人霊譚（1 祟る神霊／2 祭祀を乞う死霊）／【四】神職、国学者の幽霊ばなし／おわりに 六章 「百物語」断章 【一】百座会／【二】『黒甜瑣語』の「百灯物語」／【三】月待・日待・庚申待の怪談会／【四】最終話の重要性／【五】理髪師と百物語／【六】細木香以と百物語／【七】彫師山本信司／【八】怪を語れば怪至る―百物語の現場性

第四部 読本怪談集の世界 一章 読本怪談集の展開 はじめに／【一】寛延以降、宝暦・明和期／【二】安永・天明期／【三】寛政以降／おわりに 二章 『老嫗茶話』の転変 写本から刊本へ はじめに／【一】『老嫗茶話』から『新編奇怪談』へ／【二】所収説話の対照／【三】『新編奇怪談』の編集処理／【四】堀主水の怪談と会津騒動／【五】『新編奇怪談』から『古今奇談紫双紙』へ／【六】『紫双紙』改題と再版の背景／おわりに 三章 『町聴私記』素材考 初期江戸読本史の一齣 はじめに／【一】先行研究と書誌について／【二】白話小説翻案系怪談としての『町聴私記』／【三】「侠夫奸智刑斃」と「智恵有殿」／【四】「斬二螻蛇一医レ酔レ截」と蛇食いの説話／【五】「撒二奇石一免二靈災一」と木内石亭／おわりに 四章 『警世通話』と明清小説―『娛目醒心編』、『姑妄聴之』、『獮園』 はじめに／【一】書誌と序文について／【二】「儒士の冥府を蔑如するを弁ずる話」と『娛目醒心編』／【三】「荻原左源次が妻妾骸をかへし話」と『姑妄聴之』／【四】「異仙来て井中に酒湧て酒匂の駅と云話」と『獮園』／【五】和製典拠に拠った三篇について／おわりに 五章 『(実説)妖怪新百話』の方法 「実話」化された読本



# なぜ少年は聖剣を手にし、死神は歌い踊るのか

ポップカルチャーと神話を読み解く17の方法

神戸神話・神話学研究会、

植朗子、清川祥恵、南郷晃子編

ISBN978-4-86766-066-9 C0070

A5判・並製・288頁・

定価：本体1,900円（税別）

2024  
刊行

映画、マンガ、アニメ、音楽、ゲーム、ラノベ、を学問する方法！ありとあらゆる場面で私たちは漫画を読み、ゲームをし、アニメや映画を鑑賞しています。この本は、それらを「学問」としてより深く知りたい、考えたいとあなたが思ったときに——ポップカルチャーと神話をめぐる学びの旅に出たいとあなたが思ったそのときに——携えるアイテム、手に取る一冊として作りました。

各章の冒頭には、「アプローチ方法」と「作品概要」を記し、どのような学問的な立場から、どのような分析視点から、それぞれの論者が作品にアプローチするかを示し、読解していく方法を丁寧に記しました。物語は、読まれると同時に私たちの見る世界を形作り、息づきははじめたイメージは、あらたな枠組みを作り始める——。そんな物語とそこに現れる神話は、現代を生きる私たちにとって何なのでしょう。

ポップカルチャーや神話について関心がある人はもちろん、レポートや卒論のような少し「真面目」な目的でポップカルチャーや神話、あるいはその両方の関係を考えてという人に。本書で旅に出てみませんか。執筆は、植朗子、清川祥恵、南郷晃子、川村悠人、渡勇輝、木下資一、斎藤英喜、横道誠、木村武史、勝又泰洋、三村尚央、上月翔太、鈴村裕輔、庄子大亮、平藤喜久子、藤巻和宏、河野真太郎。

## 【目次】

### 【米津玄師「死神」×死神】

#### 米津玄師「死神」考（南郷晃子）

— はじめに／二 落語「死神」と米津玄師「死神」／三 落語「死神」のルーツ／四 日本における死神／五 死神の喜悦／六 終わりに

### 【BLEACH × 言葉】

#### 死神たちは言葉を振るう——『BLEACH』と古代インドにおける言葉と詠唱（川村悠人）

— はじめに／二 『BLEACH』と古代インドにおける言葉／三 言葉の詠唱／四 おわりに— 古代と現代を繋ぐ「言葉」

### 【東方 Project × 幻想】

#### トポスとしての別世界——「東方 Project」の世界観と想像力（渡勇輝）

— はじめに／二 データベースとしての東方／三 底流にある「神道」的世界／四 トポスとしての別世界／五 おわりに

### 【コラム】

#### 『サマータイムレンダ』の蛭子神——異形神の孤独と悲しみ（木下資一）

### 【コラム】

#### 「魔術師」として生きること（斎藤英喜）

### 【鬼滅の刃 × 聖剣】

#### 『鬼滅の刃』炭治郎に継承される「聖剣」——日輪刀と刀鍛冶の物語（植朗子）

— はじめに／二 日輪刀と鬼殺隊の超自然的な力／三 竈門家と「日の呼吸」をつなぐ縁／四 継承される「聖剣」縁吉の日輪刀／五 「聖剣」と「英雄」のモチーフ／六 「聖剣」継承の助力者となる刀鍛冶たち／七 おわりに

### 【怪奇マンガ×終末】

#### 神話の原初的断片としての怪奇マンガ——ジャンル論的考察（横道誠）

— 聖俗×生理的な嫌悪感×狂気=戦慄+拙劣／二 日本怪奇マンガ小史／三 五つの作品に焦点を当てて／四 おわりに

### 【美少女戦士セーラームーン×プリコラージュ】

#### 美少女戦士セーラームーン——プリコラージュと神話・宗教・スピリチュアリティ・科学技術（木村武史）

— はじめに／二 伝統的な神話素とモチーフの採用と転換／三 セーラー戦士の身体表象／四 コズミックな戦い／五 科学／技術と神話・宗教の融合／六 結び

### 【コラム】

#### ローマ神話の「母と息子」——『コロレイナス』にみる蜷川幸雄の階段の利用法（勝又泰洋）

### 【葬送のフリーレン×記憶】

#### 「英雄神話」の語り直しとしての『葬送のフリーレン』（三村尚央）

— 序／二 過去の模倣としての現在／三 「内なる心」を描く物語形式— 叙事詩から小説へ／四 過去を思い出すことの重要性と危険性／五 「魔法」と「言葉」— 自身の「外」と「内」の繋がりと断絶／六 結語

### 【坂道のアポロン×音楽】

#### ジャズする神々、あるいは友人たち——『坂道のアポロン』における神話的イメージの重なり合い（上月翔太）

— 「坂道のアポロン」とは誰か／二 もうひとりの「アポロン」／三 呪いと憧れの神話的イメージの重なり／四 光の交流／五 アポロンの音楽とディオニュソスの音楽のマンガ表現／六 ジャズのマンガ表現／七 ケンカとしてのジャズ

### 【君の名は。×彗星】

#### 映画『君の名は。』に見出す「現代の神話」の可能性（鈴村裕輔）

— はじめに／二 入れ替わる身体の神話性／三 水と彗星／四 彗星と大火／五 忘却と記憶／六 スペクタクルとしての災厄／七 おわりに

### 【ゴジラ×怪獣】

#### 「怪獣」の神話性——『ゴジラ』たちは何を表象するのか（庄子大亮）

— はじめに／二 ゴジラ映画の展開／三 ゴジラが意味するもの— ゴジラと竜／四 「他者」としての怪獣／五 怪獣の多様な相貌／六 おわりに

### 【コラム】

#### ポップカルチャーから何を論じるのか（平藤喜久子）

### 【コラム】

#### 保守×愛国×神話——「美しい国」のポップカルチャー（藤巻和宏）

### 【進撃の巨人×天地創造】

#### 国造りと（反）成長の物語——『進撃の巨人』とポスト冷戦の私たち（河野真太郎）

— はじめに／二 巨人の神話／三 戦後日本と『進撃の巨人』／四 グローバリゼーションと民族紛争、部族主義へ／五 反成長と不思議の国の巨人たち

### 【ジャガーノート×ポスト・コロニアリズム】

#### 暴走する運命——英米近代における「ジャガーノート」表象（清川祥恵）

— 序／二 「ジャガーノート」のエティモロジー／三 「狂気」の自覚／四 運命の糸／五 結論— 暴走する世界の行方あとがき（植朗子）



# 終わっていない、逃れられない

〈当事者たち〉の震災俳句と短歌を読む

加島正浩

ISBN978-4-86766-060-7 C0095  
四六判・並製・224頁・  
定価：本体1,900円（税別）

2024  
刊行



凄惨な出来事の「以後」を生きざるを得なくなった歌人や俳人たち——。その歌をささえるものはなにか？ 平時に研鑽された〈よい歌〉を生み出す技法や基準が、災害時に機能しなくなったとき、俳人／歌人はどのように句や歌を詠むのか。平時とは異なる状況におかれながらも、なぜ、句や歌を詠もうとするのか。句や歌を詠むことでどう〈被災〉を乗り越えようとしているのか。

どのような言葉が生み出され、どのような思考が可能になったのか。〈被災〉時に歌を詠むことで何を訴えようとしたのか。

定型の表現を用いて俳人・歌人がどのように東日本大震災に対峙したのかを探る。付・震災歌集リスト／句集リスト。装画：金原寿浩「浪江の枝垂れ紅梅」。

忘れてしまったことすら忘れてしまう、私たちのための書。

【本書は、凄惨な出来事の「以後」を生きざるをえなくなった歌人や俳人に言及する。彼ら・彼女らは失った／失われつつある〈なにか〉と対峙しつづけている。彼ら・彼女らの「以後」の句や歌を支える〈なにか〉に関する本書の分析を通じて、この一三年間でなにが失われたのかを考察してもらえれば、幸いである。そこでの考察を基に、新たな震災「以後」の俳句や短歌が生まれれば、

それに勝る喜びはない。】……「序章 東日本大震災は「普遍性」に回収できるのか」より

## 【目次】

序章 東日本大震災は「普遍性」に回収できるのか  
本書の目的／なぜ東日本大震災の特殊性に着眼するのか／東日本大震災は「当事者」だけが直面した問題か／失った感覚すら失ってしまう日常の前で

- 第一章 原発「事故」後の問題とは何か  
——東海正史『原発稼働の陰に』・佐藤祐禎『青白き光』
- 第二章 「事故」後の福島をどう捉えるか  
——齋藤芳生『湖水の南』・市野ヒロ子『天気図』・駒田晶子『光のひび』
- 第三章 警戒区域となったふるさとにどう関わるか  
——三原由起子『ふるさとは赤』『土地に呼ばれる』
- 第四章 「事故」後の福島に住むということ  
——五十嵐進『雪を耕す』・澤正宏『終わりなきオブセッション』
- 第五章 福島をどう語るか  
——夏石番矢『ブラックカード』・中村晋『むずかしい平凡』・本田一弘『磐梯』『あらがね』
- 第六章 「文学」は隠蔽する  
——永瀬十悟『三日月湖』・小野智美編『女川一中生の句あの日から』
- 第七章 東日本大震災は終わっていない  
——逢坂みずき『まぶしい海』・梶原さい子『リアス／椿』・近江瞬『飛び散れ、水たち』・照井翠『龍宮』
- 終章 忘れてふりをする人たちのために  
あとがきに代えて

■資料  
震災歌集リスト 震災句集リスト

# 歌舞伎 研究と批評 69

特集・古浄瑠璃とその周辺

歌舞伎学会編

ISBN978-4-86766-058-4 C3374  
A5判・並製・168頁  
定価：本体2,330円（税別）

2024  
刊行

歌舞伎学会が発行する学会誌『歌舞伎 研究と批評』（年1冊刊行）の第69号。

本号の特集は「古浄瑠璃とその周辺」。古浄瑠璃正本の挿絵をめぐる——『村松物語』を例に——（糸 汐里）、加賀掾古浄瑠璃『源三位頼政』諸々——志水文庫蔵絵入本の紹介——（川端咲子）、加賀掾古浄瑠璃『源三位頼政』諸々——志水文庫蔵絵入本の紹介——（川端咲子）、古浄瑠璃の諍論体（松波伸浩）、古浄瑠璃『弘知法印御伝記』の英語歌舞伎化をめぐる（ローレンス・コミンズ（訳 日置貴之））を掲載。

ほか、投稿論文（古川諒太、角田佑一）、演劇年間評（堤 春恵、三浦廣之、上田由香利、安富 順）、今岡謙太郎による令和五年度歌舞伎学会秋季大会印象記、追悼として、三代目猿之助賛、四代目段四郎賛（秋山勝彦）を掲載。

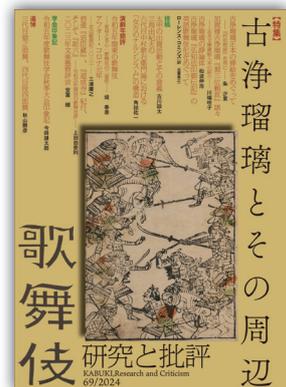
## 【目次】

特集：古浄瑠璃とその周辺

- 古浄瑠璃正本の挿絵をめぐる——『村松物語』を例に——（糸 汐里）

68号から文学通信の発売になりました

- 加賀掾古浄瑠璃『源三位頼政』諸々——志水文庫蔵絵入本の紹介——（川端咲子）
  - 古浄瑠璃の諍論体（松波伸浩）
  - 古浄瑠璃『弘知法印御伝記』の英語歌舞伎化をめぐる（ローレンス・コミンズ（訳 日置貴之））
  - [投稿]
  - 太申の出資活動とその意義（古川諒太）
  - 三島由紀夫の六代目中村歌右衛門論における「女方のナルシシズム」の構造（角田佑一）
  - [演劇年間評]
  - 令和五年関東の歌舞伎——変身と本心：歌舞伎の二重性——（堤春恵）
  - アフター・コロナ元年——定点観測記二〇二三——（三浦廣之）
  - 倍速『忠臣蔵』、『道成寺』紀行、そして『助六』——令和五年関西の歌舞伎評——（上田由香利）
  - 二〇二三年文楽愚管評言（安富 順）
  - [学会印象記]
  - 令和五年度歌舞伎学会秋季大会印象記（今岡謙太郎）
  - [追悼]
  - 三代目猿之助賛、四代目段四郎賛（秋山勝彦）
- 編集後記



# 戦前期週刊誌の文学と視覚表象

『サンデー毎日』の表現戦略

荒井真理亜・副田賢二・富永真樹・中村健編

ISBN978-4-86766-068-3 C0095  
A5判・上製・640頁・一部カラー  
定価：本体4,500円（税別）

2024  
刊行

「中途半端」で読み捨てられた媒体としての週刊誌。その特質を明らかにしていくことで何がわかるのか。1922年創刊の週刊誌『サンデー毎日』の、創刊から被占領期までの誌面における表現戦略に、様々な角度から考察を加え、戦前期週刊誌の「文学」の発信/受容の実態を明らかにする。「文学」や「作家」のあり方のみならず、その誌面に展開された視覚表象とレイアウトを考察し、雑多な表象と言説の場としてのメディア空間の様相を捉える。『サンデー毎日』だけではなく、同時期の『週刊朝日』への考察も加え、歴史的意義とメディア史的特質をも明らかにする。『サンデー毎日』を中心にした膨大な量の戦前期週刊誌の調査と、そこで作成した様々なデータベースという量的な研究成果を基盤とし、戦前期週刊誌メディアの多角的な解明を目指す書。全体を、第1部「週刊誌メディアの誕生とその展開」、第2部「週刊誌における「文学」の生成/消費と作家たち」、第3部の「「見ること」の場としての『サンデー毎日』」、第4部「戦後週刊誌の展開とその表象」、データベース、で構成。交錯する言説とイメージから、戦前期週刊誌は何をどう表現してきたのかを、明らかにできるのか。今後の文学・メディア研究必携書！編著者、荒井真理亜/副田賢二/富永真樹/中村健。執筆者、青木康晋/天野知幸/尹芷汐/小澤純/五島慶一/西山康一/原卓史/松村良/三浦卓/渡邊英理。【文化構造とその消費が世界的に多様化し、分散しつつある現代の社会のなかで、今後の文学・メディア研究は、研究対象を区画化/特権化し、その内部に閉じこもるような姿勢のままでは、もはや有効な視座を提示することはできないだろう。貪欲な大衆の大量消費メディアとして、同時代の言説空間の内部で浮遊していた戦前期週刊誌への研究史的欠落を意識した上で、本書では、創刊一〇〇周年を超えて、その歴史的意義と評価を問われている一九二二年創刊の週刊誌『サンデー毎日』の、創刊から被占領期までの誌面における表現戦略に、様々な角度から考察を加えた。そこでの「文学」や「作家」のあり方のみならず、その誌面に展開された視覚表象とレイアウトの考察を中心に、雑多な表象と言説の場としての『サンデー毎日』のメディア空間の様相を、同時期の『週刊朝日』への考察も加えつつ、様々な角度から検証し、その同時代的意義とメディア史的特質を明らかにする】……「はじめに」より

## 【目次】

戦前期『サンデー毎日』のアウトライン  
はじめに一戦前期週刊誌をめぐる研究史と問題の所在 [副田賢二]  
序章 『サンデー毎日』の読書環境と文学に関する編集方針について [中村健]

## 第1部 週刊誌メディアの誕生とその展開

第1章 『サンデー毎日』の起源・創刊時の大阪毎日新聞社の雑誌戦略 [荒井真理亜]

第2章 芥川龍之介と『サンデー毎日』— 菊池寛を補助線に [五島慶一]  
第3章 第四次『新思潮』の〈物語〉をリロードする— 久米正雄『風と月と』と週刊誌メディア [小澤純]  
第4章 一九二〇年代の『サンデー毎日』文壇ゴシップ欄と「作家」像— 『文芸時代』同人を例に [三浦卓]  
第5章 薄田泣菫と『サンデー毎日』— 文学場における編集者の位置 [西山康一]  
◆『サンデー毎日』表象史 1922～1927

## 第2部 週刊誌における「文学」の生成/消費と作家たち

第1章 耽綺社のメディア戦略/メディアの耽綺社戦略— 『サンデー毎日』を中心に [原卓史]  
第2章 子母澤寛の股旅物におけるテキスト・挿絵の関係と洗練のプロセス— 週刊誌における文学と表象表現の一定型 [中村健]  
第3章 『サンデー毎日』と新感覚派— 『文芸時代』同人たちの週刊誌との関わり [松村良]  
◆『サンデー毎日』表象史 1927～1931

## 第3部 「見ること」の場としての『サンデー毎日』

第1章 戦前期『サンデー毎日』表紙論— 「週刊誌的レイアウト」の構築と表象の消費 [副田賢二]  
第2章 『サンデー毎日』と「雪岱調」— 小村雪岱美人画に見出されたもの [富永真樹]  
コラム① 植村俊と『サンデー毎日』の視覚空間 [副田賢二]  
◆『サンデー毎日』表象史 1932～1940

## 第4部 戦後週刊誌の展開とその表象

第1章 GHQ占領期における『サンデー毎日』— ヒューマン・インタレストと親和的「アメリカ」 [天野知幸]  
第2章 週刊誌メディアと中上健次— 『朝日ジャーナル』と『週刊朝日』を中心に [渡邊英理]  
コラム② 「旅」物語の消費— 『週刊朝日』の連載旅行記「新日本名所案内」 [尹芷汐]  
◆『サンデー毎日』表象史 1941～1951  
週刊誌メディアの現場から  
元『週刊朝日』編集長・青木康晋氏 講演・インタビュー  
○講演「週刊誌メディアの歴史と現在」  
○インタビュー

## 第5部 データベース篇

『サンデー毎日』の表象空間・その視覚表象データベース  
【1】データベースの目的とオープンデータ  
【2】戦前期『サンデー毎日』特別号視覚表象データベースの特徴 [中村健]  
【3】戦前期・被占領期『サンデー毎日』表紙絵データベース [副田賢二]



# 説話文学研究の海図

説話文学会六〇周年記念論集

説話文学会編

ISBN978-4-86766-056-0 C0095

A5判・並製・384頁

定価：本体3,200円（税別）

2024  
刊行



現在の説話文学研究は、「説話」という概念自体の拡大と共に、文学研究の学際化に伴って、美術史・宗教史等々との境界を越えつつある。その最前線の様相を荒木浩・伊藤聡・肥田路美の三氏により紹介。シンポジウムでは、中国の仏伝文学である『釈氏源流』をとりあげ、小峯和明・吉原浩人・山本聡美・河野貴美子の四氏に加え、コメンテーターとして張龍妹・李銘敬の二氏により国際的かつ学際的な研究課題に取り組む。ラウンドテーブルでは、本井牧子・牧野淳司・恋田知子・高橋悠介の四氏に、研究の現状や課題をお話いただいた。

座談会「説話研究の未来——〇〇年後の研究はありうるか？」ではハルオ・シラネ、渡辺麻里子、陸晚霞、趙恩鶴、小峯和明の各氏により語り合っており、ベテランから若手まで一四名によるエッセイも収録。

## 【目次】

I 講演会 説話の文学・美術・宗教 ①〈裏返ししの仏伝〉という文学伝統一『源氏物語』再読と尊子出家譚から●荒木 浩／②説話文学研究と宗教研究のはざまから●伊藤 聡／③仏教美術の物語表現法●肥田路美 II シンポジウム 説話の文学・美術・宗教—『釈

氏源流』を軸に ①仏伝文学としての『釈氏源流』●小峯和明／②『釈氏源流』 仏教東伝記事の歴史観と挿図の意味●吉原浩人／③造形語彙集としての『釈氏源流』—日本中世絵巻との接点を探る●山本聡美／④『釈氏源流』を通してみる明代絵入り刊本の出版と流通●河野貴美子／①『釈氏源流』の図像伝播・異時同図法・仏法と王法の関係について●張 龍妹／②『釈氏源流』の編纂と版本について●李 銘敬 III ラウンドテーブル 説話文学研究つぎの六〇年に向けて 趣意文●近本謙介／①説話集研究の現状と今後●本井牧子／②軍記物語研究と説話文学研究●牧野淳司／③説話と絵画をめぐる研究の動向と展望●恋田知子／④説話の観点からみた能楽研究の動向と展望●高橋悠介／司会者より●佐伯真一 IV 座談会 説話研究の未来——〇〇年後の研究はありうるか？ 渡辺麻里子／陸晚霞／趙 恩鶴／ハルオ・シラネ【オブザーバー】河野貴美子／【司会】小峯和明 V エッセイ 説話文学会六〇周年に寄せて 説話文学会の設立時を回想して●高橋 貢／説話文学研究の可能性—過去・現在・未来の三世相、フィールドとテキスト●阿部泰郎／探し物と考え事—現代の注釈の場●伊東玉美／説話文学と絵画●石川透／表象をつなぐ—画題と説話研究●齋藤真麻理／説話と変形菌の汎世界性を見つめて●杉山和也／古典を現代語訳する、ということ●田中貴子／〈粹〉を超えて拓かれる説話研究●目黒将史／方法論を携えて●森 正人／説話文学研究から学んだこと●阿部龍一／逸話的様式の寡黙な王朝文学—貴族説話集の機能を考える●イフォ・スミッツ／韓日説話に見る「左と右」「数字」「方位」の話●琴 榮辰／龍の説話学をめざして●高 陽／ベトナム説話文学世界の再発見と日本説話文学会の架け橋の存在●ファム・レ・フイ 説話文学会 例会・大会の記録（二〇一三～二〇二三）あとがき●河野貴美子

# REKIHAKU 特集・蔵書をヒラク

国立歴史民俗博物館・  
工藤航平・箱崎真隆編

ISBN978-4-86766-055-3 C0021

A5判・並製・112頁・フルカラー

定価：本体1,091円（税別）

発行 国立歴史民俗博物館

発売・編集協力 文学通信

2024  
刊行



国立歴史民俗博物館発！『REKIHAKU』！

そもそも蔵書とはなにか。例えば人の本棚からは何がわかるだろう？古代から現代まで存在し、そして未来でも媒体や構築者層をより多様化させながらも、意味を持つまとまり、体系化された〈知〉の表象、という姿を持つ、身近な存在「蔵書」を考えぬく。

「蔵書」から、人の〈知〉の形成・継承のプロセスは、どう解き明かすことができるのか。

例えば江戸時代には、身分を問わず一挙に蔵書を構築する層が拡大し、全国津々浦々に個性を持った蔵書が構築された。この時の〈知〉の形成は、個別具体的な問題との格闘から出発して、経験的に得られた即時的な生活の知恵を前提に、さまざまな情報や、書籍の主體的な読書により思想化し、為政者や知識人の言説や故事・古典の〈知〉によって自説を補強したり、昇華させたり、権威づけることが行われたことがわかっている。

また現代の資料整理や研究の場では、『国書総目録』の分類項目を適用したり、研究者オリジナルの項目設定がなされ、蔵書構築者の意図や価値観を踏まえていなかったことも多かったが、研究視角の広がりに合わせて、書籍を文書と同様に史料として扱い、地

域の遺された多種多様な書籍に注目して、書籍がもつ社会的な影響力の解明や、読者・社会の変容を描く研究が行われるようになってきた。そんな研究の現状についても、本特集では言及する。個人や組織に半ば身体化していると言っても過言ではない「蔵書」。過去の蔵書について調べていくと、長い歴史のなかで築き上げた知的営為のあり方、人の織り成す知的営為の豊かさに気づくことができる。その蔵書文化を考える研究の最前線をお届けする。

## 【特集目次】

- 人はなぜ他人の本棚をのぞきたい衝動に駆られるのか 蔵書文化とははじめ（工藤航平）
- 古代の蔵書を考える手がかり●COLUMN 古代天皇の宝庫——国家の宝物と天皇の宝物と（小倉慈司）
- 中世の「知」の体系はこうして作られた 中世鎌倉武家と寺家のアーカイブズ——金沢文庫・称名寺をてがかりに（貫井裕恵）
- 生活のなかの書物・蔵書から民俗文化について考える 書物と民俗——地域における蔵書をめぐって（小池淳一）
- 書籍からさぐる「知のありよう」●COLUMN 松代藩真田家の本箱（山中さゆり）
- 江戸時代初期に「書院造」が完成するまで 日本住宅における「知を形成する空間」（小粥祐子）
- 「日本間だと、すぐに横になってしまう」●COLUMN 池波正太郎の書斎（菅谷壽美子）
- 書籍は他所に残されている可能性が高い＝希少価値が低い？ 旧家に伝来した書籍保存の課題（竹原万雄）
- 蔵書を地域の人びとの営みがわかる資料としてとらえ直す 「羽田八幡宮文庫旧蔵資料」の郷土資料としての再構築（岡村龍男）

# 「お静かに!」の文化史

ミュージアムの声と沈黙をめぐる

今村信隆

ISBN978-4-86766-070-6 C0070

四六判・並製・304頁

定価：本体1,900円（税別）

2024  
刊行

芸術と出会う場所、美術館。その鑑賞はどのような環境で行われるのが望ましいのだろうか。

作品にじっくりと向き合い、それを味わったり理解したりするための〈沈黙〉か〈静粛〉か。それとも〈語らい〉や〈対話〉のある空間か。作品の鑑賞にとっては、どちらが、より好ましいだろうか。あるいは、どちらがより「正しい」のだろうか。

本書は、美術作品の鑑賞という営みと「声」や「会話」との関係という問題について考える。「お静かに!」の背後にひろがる諸問題である。

〈沈黙〉や〈静粛〉か。〈語らい〉や〈対話〉か。対立させて考えるのではなく、両者に真摯に向き合い、人間にとっての根源的な欲求である美術鑑賞について、その空間について考えます。

美術館のみならず、図書館、劇場、コンサートホールなど、公共性のはざままで揺れながら考える人にもぜひお読みいただきたい本です。

## 【目次】

はじめに

凡例

## 1 美術館という場から考える

芸術と出会う場所／「お静かに」の要請／沈黙と語らいの楽しみ／公共空間としてのミュージアム／消費空間としてのミュージアム

## 2 雑音と権力

声と音／音読と黙読／図書館と黙読／マナーではなくルールとして／私語の問題／コンサートホールと劇場／「観客」としてのアイデンティティ／雑音と権力／広場と街路

## 3 会話と雑談

会話の許容度／雑談とは何か／ミュージアムでの正談と雑談／場違いな会話／書きことばの権威／価値の判定者

## 4 「公共性」を考える

「公共性」の3つの意味／公共性のはざま／ハーバーマスの公共性／テンプルとフォーラム／賑やかな図書館のイメージ

## 5 鑑賞と美術

沈黙・静粛の側から／沈黙の求め／館種と声／「美術館」と「博物館」／鑑賞の孤独／「一緒に訪れ、独りで観る」／美術作品という問い／感覚のノズルの細くする／まなざしをデザインする／美を求める心

## 6 沈黙と静粛に関するケーススタディ

「静坐潜心シテ之ヲ熟視セバ」／「その一言一句も聞き漏らすまいと、息を殺して待っていなければならない」／「甚だしく淋しくなければならぬもの」／「心の奥でしめやかに静かにとめどもなく涙が流れる」／「我々は沈黙する以外にないのだ」

## 7 声と語らいの価値

誰かのとなりで／『対話型鑑賞のこれまでとこれから』／視覚に障害がある人となない人の対話／対話の力／二重のよこび 一七世紀フランスの事例から／他者との共感／社会的接着剤としての美的経験／美的共同体を推進する／人びとをへだてている障壁を突き破るおわりに

# REKIHAKU 特集・カメラ越しの世界

国立歴史民俗博物館・川村清志・樋浦郷子編

ISBN978-4-86766-059-1 C0021

A5判・並製・112頁・フルカラー

定価：本体1,091円（税別）

発行 国立歴史民俗博物館

発売・編集協力 文学通信

2024  
刊行



立理子・柴崎茂光・上野祥史・高科真紀・比嘉豊光・正垣雅子が執筆。

特集以外の記事も、好評連載・鷹取ゆう「ようこそ！ サクラ歴史民俗博物館」、石出奈々子のれきはく！探検ほか、盛りだくさんで歴史と文化への好奇心をひらいていきます。

歴史や文化に興味のある人はもちろん、そうではなかった人にもささる本。それが『REKIHAKU』です。年3回刊行！

## 【特集目次】

特集対談 写真は何を物語るのか

---MINAMATA・アジア・食---（森枝卓士・川村清志）

1 「公開」と「利用制限」のバランスをどうとるか● COLUMN  
地域に残された写真の保存と活用の今（蓮沼素子）

2 ステレオ写真のデジタル化で見えてくるもの● COLUMN  
富士山の古写真を読み解き、展示する（井上卓哉）

3 写真資料の持つ可能性（チカラ）を考える● COLUMN  
写真のチカラ（島立理子）

4 忘れられた地域の記憶をよみがえらせる● COLUMN  
写真資料を用いたフィールドワークの地域還元

——写真と現場の往復作業を通して——（柴崎茂光）

5 写真から3Dデータへの変化は何をもたらすのか  
記録メディアとしての3Dデータ（上野祥史）

6 戦後沖縄の記録者・阿波根昌鴻● COLUMN

写真の価値と可能性——阿波根昌鴻写真の軌跡——（高科真紀）

7 沖縄写真をめぐる意義と課題● COLUMN  
沖縄写真の今日（比嘉豊光）

8 創作者の立場から模写と写真との関係を考える

絵画を模写すること——写真との関係——（正垣雅子）

国立歴史民俗博物館発！歴史と文化への好奇心をひらく『REKIHAKU』！いまという時代を生きるのに必要な、最先端でもしる歴史と文化に関する研究の成果をわかりやすく伝えます。特集は「カメラ越しの世界」。カメラが発明されて200年。感光板からフィルムへ、モノクロからカラーへ、アナログからデジタルへと展開してきましたが、本特集では、博物館や研究分野における写真をめぐる今日的な課題と意義を、主に資料としての写真、道具としての写真、そして表現としての写真という側面から迫っていきます

写真のなかには、時には現実としては受け入れがたいものであったり、逆に現実であると錯覚させたりするものもあります。画像のデジタル化や加工技術の発達によって、現実とフィクションの境界は、ますます曖昧なものとなっています。その意味で私たちは、写真を正しく読み取るためのリテラシーが今、必要とされています。私たちの日常に溢れる写真は、一体何なのか。想像以上に広がりを持つその奥行きを見ていきます。

トップに森枝卓士と川村清志の対談「写真は何を物語るのか MINAMATA・アジア・食」掲載のほか、蓮沼素子・井上卓哉・島

# 開講！木彫り熊概論

歴史と文化を旅する

北海道大学大学院文学院 文化多様性論講座

博物館学研究室・田村実咲編

ISBN978-4-86766-054-6 C0070  
四六判・並製・368頁・口絵カラー  
定価：本体2,200円（税別）

2024  
刊行



あなたの元にやってきた木彫り熊たちは、どこから来たのか？木彫り熊概論、開講します！1970年代には「現在道内で生産される木彫り熊は、年間約250万個、ザット15億円」とも伝えられ、北海道の一大土産品産業になった、木彫り熊。

本書は、北海道木彫り熊が歩んできた歴史を振り返り、土産店、職人・作家、有志の研究会、展覧会を企画した博物館や大学など、木彫り熊に携わる人々の多彩な活動と現場の声から、木彫り熊をあらたに捉え直し、その魅力と私たちとの関係とを明らかにします。

さらに研究としての木彫り熊の裾野を広げるため、絵画的な方法で表現されたクマ・ヒグマの事例より、美術・文化の方面からクマについて考えていきます。また、ミュージアム・コレクションとしての木彫り熊の可能性にも注目します。博物館はどのように私たちの生活にありふれた資料を収集・保存し、展示しているのか。資料としての位置づけや在り方、コレクション形成のプロセスの事例をもとに、木彫り熊のこれからを探ります。

カラーで「木彫り熊基礎知識」を掲載するほか、図版・資料も多数掲載。付録として「木彫り熊関連年表」も完備。

執筆・インタビューは、田村実咲、武永真、山崎幸治、青沼千鶴、増子博子、是恒さくら、今村信隆、寺農織苑、尾崎織女、阿部麟太郎、(有)トミヤ澤田商店、遊木民。

【構成】口絵 木彫り熊基礎知識 はじめに (田村実咲)

1 木彫り熊を旅する 第1章 木彫り熊をたどる (田村実咲)  
introduction ●北海道観光と木彫り熊 / 1 八雲熊彫の足跡 / 2 アイヌの木彫り熊の足跡 / 3 全道へ広がった木彫り熊の制作 / epilogue ●たくさんの「ふるさと」いくつもの「旅路」 第2章 木彫り熊を訪ねる 1 木彫り熊を訪ねる前に (田村実咲) / 2 - 1 [木彫り熊を訪ねて] 有限会社トミヤ澤田商店 / 2 - 2 [木彫り熊を訪ねて] 遊木民 (有限会社拓商) / column1 ●職人の話を聴く～木彫家・荒木繁氏を訪ねて～ (田村実咲) 第3章 木彫り熊を伝える 1 木彫り熊と展示 (田村実咲) / 2 - 1 [インタビュー] 木彫り熊展示とコミュニティ協働 (話し手=武永真) / 2 - 2 [インタビュー] 木彫り熊と文化人類学的発見 (話し手=山崎幸治) / column2 ●八雲のクマまつりレポート (話し手=青沼千鶴) 第4章 木彫り熊を探す 1 道外・海外の木彫り熊の足跡を求めて 田村実咲 / 2 - 1 [エッセイ] 月の輪を持つ木彫り熊 / 松本生まれの木彫り熊 (増子博子) / 2 - 2 [エッセイ] 日本からブラジルへ、木彫り熊の足跡を辿る日々 (是恒さくら) / 2 木彫り熊を学問する 第5章 木彫り熊と研究領域 1 描かれた、もしくは描かれなかったクマ・ヒグマ—絵画の森に動物たちを追って (今村信隆) 第6章 ミュージアムとコレクション 博物館資料としての可能性を考える 1 モノがミュージアムのコレクションになるまで (寺農織苑) / 2 日本玩具博物館のコレクション形成への歩み—世界の玩具文化を求めて (尾崎織女) / column3 ●研究成果が展示になるまで (阿部麟太郎) ●木彫り熊関連年表 (田村実咲)

# 19世紀日本における服従と反抗

山形県庄内地方の四つの集団抗議

ウィリアム・W・ケリー [著]

ワッパ騒動義民顕彰会・ケリー研究会

三原容子・佐藤利克・升川繁敏 / 佐藤エミリー綾子 [訳]

ISBN978-4-86766-067-6 C0021

A5判・並製・280頁

定価：本体1,700円（税別）

2024  
刊行

150年前の幕末維新期、山形県庄内地方では、わずか数十年間に大きな集団抗議が四つも起こった。

これらは経済的貧困によって引き起こされた、単純な「百姓一揆」ではない。その抗議は正義と公平性を求める運動であり、高官の不正行為に立ち向かった戦略と戦術は、驚くほど高度であった。日本の歴史学者とは違う視点から、米国の文化人類学者が資料を駆使して明らかにした、その全貌。原著出版から30年、ようやく日本語訳を刊行。

「三方領知替」反対闘争、「大山騒動」、「天狗騒動」、「ワッパ騒動」。従来集団的行動の分析の定番的観点とされてきた共同体、階級、党派は、本書ではこの四つの集団抗議の説明には役立たないとする。では何が集団抗議となっていったのだろうか？

【この本に書かれている出来事は約150年前に起こったものですが、地元の記憶の中に生き続けることができれば、正義を主張する地域の集団行動の力についての重要な教訓となるでしょう。19世紀の庄内の人々は、自分たちの利益を守るためには自ら立ち上がらなければならず、団結すれば成功できることを理解していました。その時代に真実であったことは、現時点でも真実のままです。】

す。】……「日本語版まえがき」より

【目次】

日本語版まえがき

序文

- 第1章 19世紀の集団抗議における階級、共同体および党派
- 第2章 庄内と酒井藩
- 第3章 見事な領民たち—1840-41年の転封反対運動—
- 第4章 従わない人々—1844年大山騒動—
- 第5章 庄内の明治維新
- 第6章 進取性と情性—第二次酒田県—
- 第7章 石代納、改革の抑制および歳出の偽装
- 第8章 ワッパ騒動の新たな展開—地方から中央へ—
- 第9章 中央政府の出番—沼間の取り調べと児島の裁判—
- 第10章 その後の経過
- 第11章 まとめ

付録 春一番の米価と庄内藩年貢率 (免) 1697-1862年

記者参考資料

- 1. 酒井家 庄内藩の歴代藩主 (第2、3、4章関係)
- 2. 庄内藩から山形県になるまでの行政区分の変遷 (第5、6章関係)
- 3. 庄内藩の行政区画 (第5章関係)

記者解説 記者あとがき 参考文献 人名索引



# その他の刊行図書 2024.10 現在

それぞれの本の詳細は文学通信サイト [<https://bungaku-report.com/>], もしくは検索してご覧下さい

	刊行年	ISBN	本体価格
<b>東アジア文化講座・全4冊 [完結]</b>			
はじめに交流ありき—東アジアの文学と異文化交流●染谷智幸編	2021年2月	978-4-909658-44-9	2800円
漢字を使った文化はどう広がっていたのか—東アジアの漢字漢文文化圏●金文京編	2021年2月	978-4-909658-45-6	2800円
東アジアに共有される文学世界—東アジアの文学圏●小峯和明編	2021年2月	978-4-909658-46-3	2800円
東アジアの自然観—東アジアの環境と風俗●ハルオ・シラネ編	2021年2月	978-4-909658-47-0	2800円
<b>デジタル・ヒューマニティーズ関連書</b>			
歴史情報学の教科書—歴史のデータが世界をひらく●後藤 真・橋本雄太編	2019年4月	978-4-909658-12-8	1900円
ネット文化資源の読み方・作り方—図書館・自治体・研究者必携ガイド●岡田一祐	2019年7月	978-4-909658-14-2	2400円
デジタル学術空間の作り方—仏教学から提起する次世代人文学のモデル●下田正弘・永崎研宣編	2019年12月	978-4-909658-19-7	2800円
欧米圏デジタル・ヒューマニティーズの基礎知識●人文情報学研究所監修	2021年7月	978-4-909658-58-6	2800円
人文学のためのテキストデータ構築入門 <small>TEIガイドラインに準拠した取り組みにむけて</small> ●人文情報学研究所監修	2022年8月	978-4-909658-84-5	3000円
デジタルストーリーを实践する <small>データとしてのテキストを扱うためのビギナーズガイド</small> ●ジョナサン・ブレインーほか	2023年10月	978-4-86766-022-5	2700円
<b>国語教育関連書</b>			
なぜ古典を勉強するのか—近代を古典で読み解くために●前田雅之	2018年6月	978-4-909658-00-5	3200円
国語の授業の作り方—はじめての授業マニュアル●古田尚行	2018年7月	978-4-909658-01-2	2700円
古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。●勝又基編	2019年9月	978-4-909658-16-6	1800円
古典教育と古典文学研究を架橋する—国語科教員の古文教材化の手順●井浪真吾	2020年3月	978-4-909658-26-5	2700円
高校に古典は本当に必要なのか—高校生が高校生のために考えたシンポジウムのまとめ●長谷川凜ほか	2021年5月	978-4-909658-36-4	1800円
古典教育をオーバーホールする—国語教育史研究と教材研究の視点から●菊野雅之	2022年9月	978-4-909658-87-6	2700円
文学授業のカンドコロ <small>迷える国語教師たちの物語</small> ●助川幸逸郎・幸坂健太郎・岡田真範・難波 博孝・山中勇夫	2022年7月	978-4-909658-80-7	1900円
# 卒論修論一口指南 ●田中草大	2022年6月	978-4-909658-78-4	1600円
未来を切り拓く古典教材 <small>和本・くずし字でこんな授業ができる</small> ●山田和人・加藤直志・加藤弓枝・三宅宏幸編	2023年3月	978-4-86766-003-4	1900円
故事成語教材考●樋口敦士	2023年7月	978-4-86766-015-7	2800円
<b>文学・歴史・美術・思想・文化</b>			
三島由紀夫は—〇代をどう生きたか—あの結末をもたらしたものに●西法太郎	2018年11月	978-4-909658-02-9	3200円
全訳 男色大鑑〈武士編〉●染谷智幸・畑中千晶編	2018年12月	978-4-909658-03-6	1800円
全訳 男色大鑑〈歌舞伎若衆編〉●染谷智幸・畑中千晶編	2019年10月	978-4-909658-04-3	1800円
紙が語る幕末出版史—『開版指針』から解き明かす●白戸 満喜子・	2018年12月	978-4-909658-05-0	9500円
二代目市川團十郎の日記にみる享保期江戸歌舞伎●ビュールク トーヴェ	2019年2月	978-4-909658-09-8	6000円
江戸の子どもの絵本—三〇〇年前の読書世界にタイムトラベル!●叢の会編	2019年4月	978-4-909658-10-4	1000円
〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典●長島弘明編	2019年5月	978-4-909658-13-5	3200円
真山青果とは何者か?●飯倉洋一・日置貴之ほか編	2019年7月	978-4-909658-15-9	2800円
注釈・考証・読解の方法—国語国文学的思考●白石良夫	2019年11月	978-4-909658-17-3	3200円
草の根歴史学の未来をどう作るか—これからの地域史研究のために●黒田智・吉岡由哲編	2020年1月	978-4-909658-18-0	2700円
薩琉軍記論—架空の琉球侵略物語はなぜ必要とされたのか●目黒将史	2019年12月	978-4-909658-20-3	15000円
怪異をつくる—日本近世怪異文化史●木場貴俊	2020年3月	978-4-909658-22-7	2800円

# その他の刊行図書 2024.10 現在

それぞれの本の詳細は文学通信サイト [<https://bungaku-report.com/>]、もしくは検索してご覧下さい

江戸初期の香文化―香がつなぐ文化ネットワーク●堀口悟・鈴木健夫・村田真知子編	2020年2月	978-4-909658-23-4	4500円
近世前期江戸出版文化史●速水香織	2020年2月	978-4-909658-24-1	品切れ
江戸中期上方歌舞伎囃子方と音楽●前島美保	2020年2月	978-4-909658-25-8	12000円
「国文学」の批判的考察―江戸のテキストから古典を考え直す●空井伸一	2020年3月	978-4-909658-27-2	11500円
好古趣味の歴史―江戸東京からたどる●小林ふみ子・中丸宣明編著	2020年6月	978-4-909658-29-6	2800円
城壁●榛葉英治・和田敦彦	2020年6月	978-4-909658-30-2	2400円
信長徹底解説―ここまでわかった本当の姿●堀 新・井上泰至編	2020年7月	978-4-909658-31-9	2700円
杞憂に終わる連句入門●鈴木千恵子	2020年6月	978-4-909658-32-6	1500円
読書の歴史を問う―書物と読者の近代 改訂増補版●和田敦彦	2020年8月	978-4-909658-34-0	1900円
説話文学研究の最前線―説話文学会 55 周年記念・北京特別大会の記録●説話文学会編	2020年9月	978-4-909658-35-7	3000円
二十四節気で読みとく漢詩●古川末喜	2020年10月	978-4-909658-37-1	2800円
古典の未来学―Projecting Classicism ●荒木浩編	2020年10月	978-4-909658-39-5	8000円
書誌学入門ノベル! 書医あづさの手控〈クロニクル〉●白戸満喜子	2020年12月	978-4-909658-41-8	1800円
王朝物語の表現機構―解釈の自動化への抵抗●星山 健	2021年1月	978-4-909658-42-5	6000円
近代平仮名体系の成立―明治期読本と平仮名字体意識●岡田一祐	2021年2月	978-4-909658-48-7	7000円
虚学のすすめ―基礎学の言い分●白石良夫	2021年2月	978-4-909658-49-4	1900円
自由律俳句と詩人の俳句●樽見 博	2021年3月	978-4-909658-50-0	2700円
『阿毘達磨集論』の伝承―インドからチベットへ、そして過去から未来へ●高橋晃一・根本裕史編	2021年3月	978-4-909658-51-7	2400円
これからの古典の伝え方―西鶴『男色大鑑』から考える●畑中千晶	2021年3月	978-4-909658-53-1	1900円
軍記物語と合戦の心性●佐伯真一	2021年4月	978-4-909658-54-8	10000円
言いなりにならない江戸の百姓たち―「幸谷村酒井家文書」から読み解く●渡辺尚志	2021年6月	978-4-909658-56-2	1500円
『奥の細道』の再構築●井口洋	2021年11月	978-4-909658-62-3	11000円
たたかう講談師―二代目松林伯円の幕末・明治●目時美穂	2021年11月	978-4-909658-66-1	2500円
読まなければならぬ―いまから古典を〈読む〉ために●木越治・丸井貴史編	2021年11月	978-4-909658-67-8	1900円
Butoh 入門 肉体を翻訳する ●大野口ベルト・相原朋枝編	2021年12月	978-4-909658-68-5	2200円
無数のひとりが紡ぐ歴史―日記文化から近現代日本を照射する ●田中祐介編	2022年3月	978-4-909658-75-3	2800円
未墾地に入植した満蒙開拓団長の記録―堀忠雄『五福堂開拓団十年記』を読む ●黒澤 勉・小松靖彦編	2022年3月	978-4-909658-71-5	2400円
地域歴史文化継承ガイドブック―付・全国資料ネット総覧 ●天野真志・後藤 真編	2022年3月	978-4-909658-72-2	1600円
日本学の教科書 Handbook for Japanese Studies ●伴野文亮・茂木謙之介編	2022年4月	978-4-909658-73-9	1800円
職業としての大学人 ●紅野謙介	2022年4月	978-4-909658-77-7	1800円
「文壇」は作られた―川端康成と伊藤整からたどる日本近現代文学史 ●尾形大	2022年4月	978-4-909658-74-6	2000円
思い出のとしまえん ●練馬区立石神井公園ふるさと文化館編 小宮佐知子・内田 弘・小林 克著	2022年5月	978-4-909658-76-0	1900円
職業作家の生活と出版環境―日記資料から研究方法を拓く●和田敦彦編	2022年6月	978-4-909658-82-1	2700円
# 卒論修論一口指南 ●田中草大	2022年6月	978-4-909658-78-4	1600円
俳句がよくわかる文法講座 詠む・読むためのヒント●井上泰至・堀切克洋編	2022年8月	978-4-909658-79-1	1900円
人はなぜ神話〈ミュトス〉を語るのか―拡大する世界と〈地〉の物語 ●清川 祥恵・南郷兎子・植朗子編	2022年9月	978-4-909658-85-2	2800円
江戸幕府の誕生―関ヶ原合戦後の国家戦略 ●渡邊大門編	2022年9月	978-4-909658-86-9	1900円

# その他の刊行図書 2024.10 現在

それぞれの本の詳細は文学通信サイト [<https://bungaku-report.com/>]、もしくは検索してご覧下さい

増補新版 東北の古本屋●折付桂子	2022年10月	978-4-909658-88-3	1800円
川瀬巴水探索—無名なる風景の痕跡をさがす●川瀬巴水とその時代を知る会	2022年11月	978-4-909658-90-6	1900円
〈転生〉する川端康成 I 引用・オマージュの諸相●仁平政人・原善編	2022年12月	978-4-909658-89-0	2700円
学芸員の観察日記 ミュージアムのうらがわ●滝登くらげ	2023年2月	978-4-909658-93-7	1600円
家康徹底解説 ここまでわかった本当の姿●堀 新・井上泰至編	2023年2月	978-4-909658-95-1	2700円
おもろさうし選詳解●島村幸一	2023年2月	978-4-909658-97-5	10000円
児童雑誌の誕生●柿本真代	2023年2月	978-4-86766-001-0	2800円
燈謎（とうめい）漢字文化圏文字遊戯の諸相●呉 修喆	2023年2月	978-4-909658-94-4	6000円
西鶴『誹諧独吟一日千句』研究と註解●中嶋 隆	2023年2月	978-4-909658-98-2	6000円
源氏物語夢見論●笹生美貴子	2023年3月	978-4-909658-99-9	7000円
古文書の科学 料紙を複眼的に分析する●渋谷綾子・天野真志編	2023年3月	978-4-86766-004-1	1900円
未来を切り拓く古典教材 <small>和本・くずし字でこんな授業ができる ●同志社大学古典教材開発研究センター・山田和人・加藤直志・加藤弓枝・三宅宏幸編</small>	2023年3月	978-4-86766-003-4	1900円
土偶を読むを読む●望月昭秀編	2023年4月	978-4-86766-006-5	2000円
東アジアの都市とジェンダー 過去から問い直す●小林ふみ子・染谷智幸編	2023年4月	978-4-86766-005-8	2800円
江戸の絵本読解マニュアル 子どもから大人まで楽しんだ草双紙の読み方●叢の会編	2023年4月	978-4-86766-007-2	2100円
和学知辺草【翻刻・注釈・現代語訳】 ●中尾友香梨・白石良夫・中尾健一郎・村上義明編 <small>小城鍋島文庫研究会校注</small>	2023年4月	978-4-86766-002-7	6000円
石牟礼道子と〈古典〉の水脈 他者の声が響く●野田研一・後藤隆基・山田悠介編	2023年5月	978-4-86766-008-9	2800円
伝統芸能の教科書●藤澤茜編著	2023年5月	978-4-86766-010-2	1900円
東アジアにおける笑話●佐伯孝弘・荒尾禎秀・島田大助・川上陽介・王 國良・崔 溶澈	2023年5月	978-4-86766-009-6	3200円
西鶴奇談研究●梁誠允	2023年5月	978-4-86766-012-6	5800円
詩のかたち・詩のころ—中世日本漢文学研究—【補訂版】●堀川貴司	2023年5月	978-4-86766-011-9	10000円
日本史のなかの中世日光山 忘れられた全盛時代●永井 晋	2023年8月	978-4-86766-017-1	2000円
文士村散策 新宿・大久保いまむかし●茅原 健	2023年8月	978-4-86766-016-4	2200円
村上春樹研究 サンプリング、翻訳、アダプテーション、批評、研究の世界文学●横道 誠	2023年9月	978-4-86766-018-8	3000円
なんで日本研究するの？●シュミット堀佐知編	2023年10月	978-4-86766-019-5	2400円
百年前の野球交流 インディアナ大学 vs 早稲田大学●錦 仁	2023年11月	978-4-86766-024-9	2800円
彰義隊、敗れて末のたいこもち 明治の名物討間、松廼家露八の生涯●目時美穂	2023年11月	978-4-86766-020-1	2500円
和本図譜 江戸を究める●日本近世文学会編	2023年11月	978-4-86766-025-6	1900円
なぜ古い本を網羅的に調べる必要があるのか <small>漢籍デジタル化公開と中国古典小説研究の展開 ● U-PARL・荒木 達雄編</small>	2023年12月	978-4-909658-64-7	2000円
西鶴解析●井口 洋	2023年12月	978-4-86766-013-3	6000円
文化権力と日本の近代 伝統と正統性、その創造と統制・隠滅●徐禎完・鈴木彰	2023年12月	978-4-86766-027-0	2800円
予言獣大図鑑●長野栄俊編・岩間理紀・笹方政紀・峰守ひろかず著	2023年12月	978-4-86766-026-3	2200円
金原明善 日本の〈偉人〉を捉えなおす●伴野文亮・渡辺尚志編	2023年12月	978-4-86766-028-7	2000円
特撮に見えたる妖怪●式水下流	2024年2月	978-4-86766-033-1	2000円
琉球文学の展望●島村幸一	2024年2月	978-4-86766-034-8	8000円
文明論と伝記の近代 明治前半期の歴史と文学●吉岡 亮	2024年2月	978-4-86766-031-7	6000円
幕末の社会変革と文芸 菊池・大橋家の文人たちの歩みを追って●佐藤 温	2024年2月	978-4-86766-036-2	6500円

新刊

新刊

新刊

新刊

# その他の刊行図書 2024.10 現在

それぞれの本の詳細は文学通信サイト [<https://bungaku-report.com/>]、もしくは検索してご覧下さい

東アジアの世界分析の方法 〈術数文化〉の可能性●水口幹記編	2024年2月	978-4-86766-029-4	3500円	新刊
研究者、魚醤と出会う。 山形の離島・飛島塩辛を追って●白石哲也・松本 剛・奥野貴士編	2024年3月	978-4-86766-037-9	1900円	新刊
地域歴史文化のまもりかた 災害時の救済方法とその考え方●天野真志・松下正和編	2024年3月	978-4-86766-043-0	1800円	新刊
武者小路実篤文学の構造と同時代状況●瀧田 浩	2024年3月	978-4-86766-032-4	4000円	新刊
〈転生〉する川端康成Ⅱ アダプテーションの諸相●仁平政人・原善編	2024年3月	978-4-86766-040-9	3500円	新刊
デジタル時代の児童の読解力 紙とデジタル比較読解調査からみえること●難波博孝編	2024年3月	978-4-86766-039-3	1500円	新刊
唐物の神能における唐土 『東方朔』『西王母』『菊慈童』『鶴亀』をめぐって●リム・ベンチャー著 青山学院大学文学部日本文学科編	2024年3月	978-4-86766-038-6	700円	新刊
江戸の王朝文化復興 ホノルル美術館所蔵レイン文庫『十番虫合絵巻』を読む●盛田帝子/ロバート・ヒューイ編	2024年3月	978-4-86766-041-6	2800円	新刊
古典の再生●盛田帝子編	2024年3月	978-4-86766-042-3	2800円	新刊
ミュージアムと生きていく●大澤夏美	2024年5月	978-4-86766-048-5	1800円	新刊
中間小説とは何だったのか 戦後の小説雑誌と読者から問う●小嶋洋輔・高橋孝次・西田一豊・牧野悠	2024年5月	978-4-86766-051-5	3200円	新刊
麻雀漫画 50 年史●V 林田	2024年6月	978-4-86766-049-2	2400円	新刊

## 日本史史料研究会ブックス

新徴組の真実にせまる—最後の組士が証言する清河八郎・浪士組・新選組・新徴組●西脇 康	2018年12月	978-4-909658-06-7	1300円	
新 神風と悪党の世紀—神国日本の舞台裏●海津 一郎	2019年1月	978-4-909658-07-4	1200円	
六波羅探題 研究の軌跡—研究史ハンドブック●久保田和彦	2020年1月	978-4-909658-21-0	1200円	
ここまでわかった戦国時代の天皇と公家衆たち—天皇制度は存亡の危機だったのか？新装版●神田裕理編	2020年7月	978-4-909658-33-3	1350円	
戦国時代と一向一揆●竹間芳明	2021年6月	978-4-909658-55-5	1600円	
幕末大江戸のおまわりさん—史料が語る新徴組●西脇 康	2021年10月	978-4-909658-65-4	1500円	
論考 日本中世史—武士たちの行動・武士たちの思想●細川重男	2022年3月	978-4-909658-70-8	1800円	

## REKIHAKU・国立歴史民俗博物館発行

REKIHAKU 特集・されど歴史●山田慎也・内田順子・橋本雄太編	2020年10月	978-4-909658-38-8	1091円	
REKIHAKU 特集・いまこそ、東アジア交流史●高田貫太・橋本雄太編	2021年2月	978-4-909658-43-2	1091円	
REKIHAKU 特集・日記がひらく歴史のトビラ●三上喜孝・内田順子編	2021年6月	978-4-909658-57-9	1091円	
REKIHAKU 特集・歴史のなかの疫病●福岡万里子・高田貫太編	2021年10月	978-4-909658-63-0	1091円	
REKIHAKU 特集・ファッション×博物館●澤田和人編・吉村郊子編	2022年2月	978-4-909658-69-2	1091円	
REKIHAKU 特集・人工知能の現代史●橋本雄太・澤田和人編	2022年6月	978-4-909658-81-4	1091円	
REKIHAKU 特集・歴史の「匂い」●小倉慈司・高田貫太編	2022年10月	978-4-909658-91-3	1091円	
REKIHAKU 特集・アートがひらく地域文化●川村清志・天野真志編	2023年2月	978-4-909658-96-8	1091円	
REKIHAKU 特集・推定不能 炭素 14 研究がとらえた未知の巨大太陽フレアの謎●箱崎真隆・橋本雄太編	2023年6月	978-4-86766-014-0	1091円	
REKIHAKU 特集・歴史をつなぐ	2023年10月	978-4-86766-023-2	1091円	
REKIHAKU 特集・顔・身体をもつ道具たち	2024年2月	978-4-86766-030-0	1091円	新刊
REKIHAKU 特集・蔵書をヒラク	2024年6月	978-4-86766-055-3	1091円	新刊
REKIHAKU 特集・カメラ越しの世界	2024年10月	978-4-86766-059-1	1091円	新刊

## 地方史はおもしろい・地方史研究協議会編

日本の歴史を解きほぐす—地域資料からの探求●地方史研究協議会編	2020年4月	978-4-909658-28-9	1500円	
日本の歴史を原点から探る—地域資料との出会い●地方史研究協議会編	2020年10月	978-4-909658-40-1	1500円	

日本の歴史を問いかける—山形県〈庄内〉からの挑戦●地方史研究協議会編	2021年3月	978-4-909658-52-4	1500円
日本の歴史を描き直す—信越地域の歴史像●地方史研究協議会編	2021年9月	978-4-909658-61-6	1500円
日本の歴史を突き詰める おおさかの歴史●地方史研究協議会編	2022年12月	978-4-909658-92-0	1500円
徳島から探求する日本の歴史●地方史研究協議会編	2023年11月	978-4-86766-021-8	1500円
<b>玉藻前アンソロジー [全3巻]</b>			
玉藻前アンソロジー 殺之巻●朝里 樹編著	2021年7月	978-4-909658-59-3	1900円
玉藻前アンソロジー 生之巻●朝里 樹編著	2022年10月	978-4-909658-83-8	1900円
玉藻前アンソロジー 石之巻●朝里 樹編著			近刊
<b>歌舞伎 研究と批評 [68号から取り扱い開始しました]</b>			
歌舞伎 研究と批評 68 特集・歌舞伎と近現代演劇●歌舞伎学会編	2024年2月	978-4-86766-035-5	2330円
歌舞伎 研究と批評 69 特集・古浄瑠璃とその周辺●歌舞伎学会編	2024年10月	978-4-86766-058-4	2330円
<b>その他</b>			
中華オタク用語辞典●はちこ	2019年3月	978-4-909658-08-1	1800円
【呉公藻・馬岳梁版】太極拳講義●沈 剛・日高崇編著	2021年8月	978-4-909658-60-9	1300円
波多野華涯書簡集—門人濱口梧洞との往復書簡●岩田秀行・小田切マリ [私家版]	2019年3月	978-4-909658-11-1	品切れ

新刊

新刊

## 話題沸騰の本

# 土偶を読むを読む

望月昭秀編

ISBN978-4-86766-006-5 C0021

四六判・上製・432頁

定価：本体 2,000円（税別）

3刷

「土偶の正体」は果たして本当に解き明かされたのか？

竹倉史人『土偶を読む』（晶文社）を大検証！

考古学の実証研究とイコノロジー研究を用いて、土偶は「植物」の姿をかたどった植物像という説を打ち出した本書は、NHKの朝の番組で大きく取り上げられ、養老孟司ほか、各界の著名人たちから絶賛の声が次々にあがり、ついに学術書を対象にした第43回サントリー学芸賞をも受賞。

『専門家』という鎧をまとった人々のいうことは時にあてにならず、『これは〇〇学ではない』と批判する"研究者"ほど、その『〇〇学』さえ怪しいのが相場である。『専門知』への挑戦も、本書の問題提起の中核をなしている（佐伯順子）と評された。

しかし、このような世間一般の評価と対照的に、『土偶を読む』は考古学界ではほとんど評価されていない。それは何故なのか。その理由と、『土偶を読む』で主張される「土偶の正体」、それに至る論証をていねいに検証する。

考古学の研究者たちは、今、何を研究し、何がわかって、何がわからないのか。専門家の役割とは一体なんなのか、専門知とはどこにあるのか。『土偶を読む』を検証・批判することで、さまざまな問題が見えてくる。本書は、縄文研究の現在位置を俯瞰し、土偶を読み、縄文時代を読む書でもある。

執筆は、望月昭秀、金子昭彦、小久保拓也、佐々木由香、菅豊、白鳥兄弟、松井実、山科哲、山田康弘、吉田泰幸。

【『土偶を読む』の検証は、たとえば雪かきに近い作業だ。本書を読み終える頃には少しだけその道が歩きやすくなっていることを願う。雪かきは重労働だ。しかし誰かがやらねばならない。（望月昭秀）... はじめにより】

### 【目次】

#### はじめに

はたして本当に土偶の正体は解明されたのか？

#### 検証 土偶を読む（望月昭秀）

#### 「土偶とは何か？」の研究史（白鳥兄弟）

#### 1 本稿の目的と内容

#### 1-1 土偶研究の「通説」

#### 1-2 本稿の内容

#### 2-1 第1期 明治期◎1868~1912年

#### 2-2 第2期 大正~昭和戦中期◎1912~1945年

#### 2-3 第3期 昭和戦後期◎1946~1988年

#### 2-4 第4期 平成期以降◎1989~2020年

#### 3 まとめ

#### 〈インタビュー〉今、縄文研究は？（山田康弘）

物語の語り手を絶対に信用するな。だが私たちは信用してしまう（松井実）

土偶は変化する。——合掌・「中空」土偶→遮光器土偶→結髪/刺突文土偶の型式編年（金子昭彦）

植物と土偶を巡る考古対談（佐々木由香・小久保拓也・山科哲）

考古学・人類学の関係史と『土偶を読む』（吉田泰幸）

実験：「ハート形土偶サトイモ説」（望月昭秀）

知の「鑑定人」——専門知批判は専門知否定であってはならない（菅豊）

#### はじめに

考古学者たちの冷たいあしらい

『土偶を読む』の評価にあらわれる専門知への疑念

専門家が言うことはあてにならない

パブリック・アーケオロジーの知見

考古学者が『土偶を読む』に向き合えなかったいくつかの理由

知の「品質管理」

まとめ—「ポスト真実時代」の専門知の役割

